

〔大和文華館の日本絵画展によせて〕

「伊勢物語下絵梵字経」をめぐる

梵字に覆われ見えにくいですが、図1には『伊勢物語』第二十七段「水鏡」の場面が描かれています。訪れなくなった男のことを想う女が、手を洗う盥の水に映る自分の姿を見ながら、「自分ほど物思ひする者はいないと思っていたが、水の下にもいたことだよ」という意味の歌を詠んだところ、男がそれを聞いて歌を返すという話で、侍女の注ぐ水で手を洗いながら、角盥の水に映る自らの顔をじっと見つめる女と、その女を几帳の蔭から窺う男の様子が表されています。

伊勢物語の絵と詞書に梵字が捺された「伊勢物語下絵梵字経」(以下、本作品と称す)は、この第二十七段以外にもいくつかの段が残されており、本来は『伊勢物語』全体に取材した絵巻であったと考えられますが、益田家と団家が一卷ずつ、東京美術学校などが断簡を所蔵していた際にはすでに十数段のみとなっており、錯簡も多くありました。その後、益田家本と団家本は分割され、現在は諸家に分蔵されています。その中で、大和文華館は益田家本の末尾にあたる「筒井筒」「水鏡」「宇津山」を所蔵しています。絵や詞書に重ねられた光明真言を表す梵字は、絵巻の所有者、もしくは制作関係者などの没後に、所縁の者が供養のために捺したのではないかと想像されます。

本作品の絵は平安時代の物語絵の構図の特徴を引き継ぎつつも、上下の畧と黒目を描く顔貌

表現には鎌倉時代の新たな特徴が見られます。平安時代の伊勢物語絵が現存しない中で、13世紀に描かれたと考えられる本作品は最も古い伊勢物語絵として知られています。詞書も、伊勢物語伝本の大半を占める定家本系統の本ではなく、定家本系統の写本が増加する室町時代以前の伊勢物語本文の一系統として注目されています。第二十七段を例にとると、定家本では男が女の歌を「立ち聞き」しますが、本作品では「立ち」が省かれています。第二十七段を描いた作例では、女の家傍に立つて和歌を聞く男が描かれることが多いですが、本作品では几帳の後ろに座る男が表されています。この珍しい図様は詞書の「立ち」の有無と関係しているのかもしれませんが。

本作品の絵に関しては、「白描」と呼ばれる墨線を基調とした描法で表されている点も注目されます。平安時代には下描きの上に濃彩を塗り、線を描き起こす「つくり絵」と呼ばれる描法で表された鮮やかな彩色の物語絵が描かれた一方で、彩色を取って用いない白描の物語絵も制作されていたことが文献から窺うことができます。平安時代の白描の物語絵は現存しませんが、鎌倉時代以降の作例が残っています。大和文華館蔵の「源氏物語浮舟帖」(図2)はその優品の一つです。『源氏物語』第五十一帖「浮舟」の後半部の写本で、白描の挿絵を2図伴っています。

雲母を引いた光沢ある白い紙の上に、繊細な墨線で自然景や人物、建物が象られています。浮舟の黒髪や匂宮の冠など限られた部分のみ艶やかな濃墨で現されており、白と黒の清らかなコントラストが大変美しい作品です。鎌倉時代には、この「源氏物語浮舟帖」のほか、「隆房卿艶詞絵巻」「豊明絵巻」などの白描の物語絵の作例がいくつか残されています。これらの作品は筆勢を抑えた均質な描線の特徴としており、次第に淡墨の使用や文様の描き込みが多くなっていく傾向にあることが指摘されています。それに対し、本作品は速度のある伸びやかな筆で簡略に表されており、描線の質に違いが認められます。その特徴から、本作品が素人の制作したものである可能性や、白描の物語絵の様式が固定化する以前の作品である可能性が考えられています。描線の質は異なりますが、本作品には、他の白描物語絵と同様の約束事に則っている面も見られます。その一つが文様の描き方です。濃彩の物語絵では、衣服は色だけでなく様々な文様で華やかに飾られていますが、鎌倉時代の白描の物語絵では、白地の美しさを活かすためか、無文です。「源氏物語浮舟帖」や、これと元は一連の作品であった「源氏物語絵詞」(徳川美術館蔵)を見ると、衣服だけでなく、御簾や畳の縁の文様も描かれておらず、白地が多く静けさを感じさせる画面となっています。しかし、全く文様が無いのではなく、匂宮の冠の纓には文様が表されています(図3)。「隆房卿艶詞絵巻」(図4)では、纓には文様は描かれていないものの、

淡墨で塗られ、白地や濃墨と区別されています。また、御簾の縁に窠文が加えられています。「豊明絵巻」になると、纓や御簾だけでなく、畳の縁や襖にまで文様が描き込まれており、華やかさを増しますが、少し煩雑な印象を受けます。こうした白描物語絵の中の文様は先述のように、次第に増加する傾向にあります。本作品中の文様の描かれ方を、第二十七段を例にして見ると、やはり衣服には文様がありませんが、纓には文様が表されています(図5)。また、畳の縁に文様は見られませんが、御簾の縁には窠文が描かれています。纓と御簾の縁は比較的早くから文様が描き込まれる場所であり、本作品は素人の筆である可能性が高いものながら、白描の物語絵の作例から文様の表し方のルールを知った上で制作されたのではないかと考えられます。本作品は非専門画家によると思われる簡略な筆致の作品であるために、他の鎌倉時代の白描物語絵の展開と関連させることが難しい面もありますが、本作品が描かれた頃にも、白描の物語絵の描き方に一定の形式が整えられていたことが窺えます。白描という描法は、つくり絵よりも手軽であるために、素人も描き易いものでしたが、その清らかで繊細な美しさに王朝の古典美への思い入れが託されもしました。素人風の素朴な表現と整った精緻な美しさの間を揺れ動きながら展開する白描物語絵の流れを考える上で、本作品は貴重な初期の作例と言えます。(図4は小松茂美編『日本絵巻大成』10巻、1978年より複写しました。宮崎も)

図1 伊勢物語下絵梵字経 第二十七段「水鏡」(大和文華館蔵) 図2 源氏物語浮舟帖(大和文華館蔵) 図3 図2部分
図4 隆房卿艶詞絵巻(国立歴史民俗博物館蔵) 図5 図1部分

